The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小門さんのコメントへの応答
Author(s)	吉田，裕香；石川，勇人；三原，悠祐
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 65-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100162
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

小門さんのコメントへの応答

【吉田裕香】

ご質問ありがとうございました。

生殖補助医療の当事者として生まれてくる人びとの声をどう聞くかということへの接続は、自分自身の研究の今後を考える上で重要なご指摘だと感じました。ありがとうございました。たとえば「存在しない人びとについて語る」という、「その語られた内容は真か偽か」という観点で語られる傾向にあるものについて、「語る」という行為そのものの意味を考えるという視点は、それぞれの行き詰まりに対してなにか手がかりを与えるのかもしれません。

ご質問の応答へ入らせていただきます。

まずふたつめの質問から先に応答させていただきたいと思います。

より多くの人びとが「わたしたち」と語ることができるようになるために、「出会い」を待ち受けることが重要であるとわたしは考えています。この出会いは、一般的な明るい響きとは少し違う意味合いを持ちます。

ホリスティック教育という観点からブーバーを読み解く吉田敦彦は、ブーバーの「出会い」は「他者の他者性（異質性）を引き受けるとき、完結していた自分たちの物語に亀裂が入り、その外部に曝される」（吉田 2007: 56）経験であるといいます。この危機への曝露としての「出会い」という読みを参考に、修士論文では久保の優越感への気づきの場面を、外部への曝露と、〈汝〉へ語りかけ応答する責務について内省する契機となる「出会いなおし」として読みました。

この「出会いなおし」が起こることが、「わたしたち」の範囲を広げるためには必要不可欠であるのではないでしょうか。ケアの倫理においてまだ聞かれていない声が発せられるとき、そこにはケアの倫理にするどい痛みを生じさせるものがふくまれているでしょう。その痛みに向き合い、外部にさらされる準備をいつでもしておくことが重要であるとわたしは考えます。

次にひとつめのご質問の「保持者」という言葉についてです。「保持者」という言葉はイマジナリーフレンドとかかわる人びとが自らをあらわすために用いる言葉です。この「保持者」という言葉が学術研究において触れられる機会はほとんどないのですが、わたしはこの「保持者」という言葉にこそイマジナリーフレンドとのかかわりを考えるうえで重要な観点が詰まっていると感じます（わたし自身は「保持者」とはべつの言葉でイマジナリーフレンドとかかわる人びとを言いあらわしたいと考えているのですが、ここでは「保持者」という言葉のまま考えていきたいと思います）。

この場合の「保持者」は、たとえば「世界記録保持者」と言う場合の「保持者」とは異なる響きを持ちます。かれらが「保持」しているのは、イマジナリーフレンドという「他者」だからです。加えて、「保持者」がいなければイマジナリーフレンドは存在しえない、「保持者」が語らなければ各々のイマジナリーフレンドについて知ることはできないということを考えれば、両者のあいだには構造的に非対称性が横たわっていると言えるでしょう。久保が、「保持者」として「自分が求めて出会ったものだから、

好きにコントロールできるのだという直感」があったと語っていることからもわかるように、「保持者」にはパターナリスティックな含意も少なからずあるとわたしは思います。そうした側面は、この非対称性からくるものなのではないでしょうか。

しかしながら、その非対称性は重要な意味をもつものでもあるとわたしは考えています。先に触れた吉田は、「私の方から、身を曝し、自己を開き、他者に呼びかけ、語りかける言葉を贈り与えていく」(同前: 129) ことの意義は、大人と子ども、教師と生徒、治療者と患者といった非対称な関係において特に際立つといいます。非対称性を含みこむ「保持者」という言葉は、自分とイマジナリーフレンドの関係のなかで、わたしからあなたに語りかけ応答する責務があるのだ、ということを忘れないために用いられる言葉でもあるように思うのです。

研究の内容からは離れてしまうのですが、わたしはいま、大学院を修了して障害者福祉施設で生活支援員として働いています。働く前は「支援員」という言葉に強く違和感をもち、利用してくださる方とフラットな関係を築きたいと願っていました。しかし、働いているうちにその考えは変わっていきました。わたしは目の前のご利用者に自分から呼びかけ、応答し、かれらの幸せについて考えなければならない、その責務に向き合ううえで、自分に「生活支援員」という役割が付されていることは非常に重要であると考えるようになったのです。しかしながら、それはかれらの良き友人であることもできるということを諦めなくてはいけないということではないのだと思います。もちろんわたしはまだまだ未熟で、ここに書いたことを実現できているとは到底思えません。それでもやはり、この原稿を書きながらフォーラムでかけていただいた言葉のひとつひとつを思い出すと、自分のなかに希望が湧いてくるのを感じます。わたし自身がいつか研究の場に戻るのか、この場所で働きつづけるのかはまだわかりません。しかしながら(目に見えない存在もふくむ)他者にいかにかかわるかというテーマは自分の人生を通じた課題でありつづけるのだと思います。願わくは研究の世界に少しでも顔を出しつづけながら考えていけますように。小門先生はじめこのような機会をくださったみなさんに心から感謝しています。ありがとうございました。

〈参考文献〉

久保香奈子（2013）『ここにいないと言わないで──イマジナリーフレンドと生きるための存在証明』，文芸社.

吉田敦彦（2007）『ブーバー対話論とホリスティック教育―他者・呼びかけ・応答―』，勁草書房.

【石川勇人】

小門穂先生、大変貴重なコメントをありがとうございます。ご質問いただいた、①よい聞き手とはどういうものなのか、そして②よい聞き手にはどうしたらなれるのか、の２点にお答えできればと思います。

まず「よい聞き手とはどういうものか」というご質問についてですが、結論から申しますと、調査対象者と信頼関係を築いているかどうかということだと考えます。こ

の信頼関係という点について、質的調査（聞き取り調査）研究に携わる研究者の声を手掛かりに今一度、考えてみたいと思います。先ほどご紹介しましたが、ハンセン病患者のライフヒストリーを研究している社会学者の蘭由岐子は、インタビュー時にハンセン病患者が出されるお茶に注目しています。調査対象者の家に来訪した際、お茶が出されるといった経験は何気ない出来事ではありますが、とりわけ「入所者の淹れたお茶」には特別な意味があると蘭は注目します。なぜなら、調査対象者がハンセン病患者に対して「生理的嫌悪感をもっているのかどうか」を見極める行為が「入居者が淹れたお茶」であるからです[1]。そのお茶を飲むという行為がなければ、調査対象者と調査者の信頼関係を築くことができなかったでしょう。つまり、蘭のケースからは、いかに聞き手が語り手の置かれてきた/いる社会状況や生活環境を理解しているかどうかが問われていると言えるでしょう。私も聞き取り調査の時に調査対象者から言われたのが、語るという行為は調査対象者が置かれてきた社会的位置性や現在の生活と切り離せないという気づきでした。調査者して、語り手の生き方を尊重すること、語られた言葉を否定しないこと、そしてなによりも信頼関係を築いた上での聞き取り調査であることが「よい聞き手」なのかと思います。

次に、「よい聞き手になるにはどうしたらいいか」というご質問についてですが、調査対象者から「学ぶ」姿勢を忘れないことかと思います。一例として社会学者の佐藤郁哉は、「インフォーマル・インタビュー」という考え方を示しています。「インフォーマル・インタビュー」とは、インタビューを通じて、調査者は調査対象者から「教えてもらう」あるいは「アドバイスを受ける」といった考え方です[2]。聞き取りの場は、調査者が聞きたいこと、知りたいことを調査対象者に訪ね、その回答を得る場ではあるでしょう。しかし、調査に慣れてくると自分の中で無意識に「前提」が作られていること、語りを聞いた際に自らの解釈が先行してしまうことがあるのではないでしょうか。それでは、調査対象者が語りを通して伝えたい声を聞き取ることは難しいかと思います。大事なのは調査者自身が自己の調査を捉え返すこと、そして時には、調査対象者から調査者自身が気づいていない、うっかり見落としてしまった視点を教えてもらうといったことも重要かと思います。聞き取りの現場でどれだけ調査対象者と真剣に格闘できるかが、「よい聞き手になる」第一歩なのではないでしょうか。

【三原悠祐】

小門先生、ご質問いただきありがとうございました。私の研究関心において、男性をケアする存在、ケアされる存在のいずれに位置づけるのかについてお聞きいただいたものと認識しております。結論から申しますと、いずれの場合も検討を重ねたいと考えております。とうのも、男性を、ケアする存在、あるいはケアされる存在と捉えたとき、いずれの場合も、あるひとつのキーワードから課題感が見えてくるからです。

1　蘭由岐子（2017）『「病いの経験」を聞き取る［新版］ハンセン病患者のライフヒストリー』生活書院，25頁.

2　佐藤郁哉（2006）『フィールドワーク 増訂版 書をもって街へ出よう』新曜社，196頁.

それは、「支配」です。ケアの倫理理論において、ケアすること支配することが紙一重であることは論じられてきたものと思いますし、一方で、ケアする側がその責任に追われ、いわゆる二次的依存などといった従属的な立ち位置に置かれてしまう、という場合もあると考えます。つまり、ケアすることも、ケアされることも、どちらも権力勾配の上部に立つことと無関係でありえません。男性―女性の間の支配―被支配の関係はよく語られるものですが、その関係をケアの授受という観点から眺めたとき、それは必ずしも一方向的なものではないでしょう。そうだとすれば、ケアする存在、ケアされる存在という分類においては、男性の立ち位置はいずれにもあると考えるべきだと思います。

（よしだ・ゆうか、いしかわ・ゆうと、みはら・ゆうすけ）